

Dr. 中路の健やか通信 (其の80)

健やか協力隊長



中路重之



第80回 第三回平均寿命サミット

◆11年ぶりの開催で分かったこと

11月22日長野市の長野県立大学で第三回平均寿命サミットが開催されました。2013年に第一回平均寿命サミットが青森市で開催されたのが最初で、第二回サミットは翌年2014年に沖縄県那覇市で開催されました。しかしそれを最後に途絶えていました。その理由は長野県で会長をやっていただく方がいなかったからです、その折、今村晴彦先生（第一回にシンポジストとして参加）が長野県立大学に移られたことを知りました。これ幸いに第三回の開催をお願いしたら快諾していただいたわけです。

メインイベントは午前中の青森、長野、滋賀、沖縄の4県によるシンポジウムでした。各県のシンポジストがそれぞれの県の健康づくりの現状と問題点を発表しました。

2020年、長野県は最長寿県の地位を滋賀県に明け渡しました。それに代わってトップに立ったのが滋賀県です。沖縄県は5年ごとに公表される都道府県平均寿命ランキングで次第にその順位を落とし、万年最下位の青森県に迫ってきています。

シンポジウムの中で、各県にもそれぞれに悩みがあることが分かりました。

長野県の長寿は保健補導員などの健康リーダーの活躍で保たれてきましたが、最近ではそのリーダーのなり手が急激に減少しているそうです。個人の生活を大切にする現代のライフスタイルの中で健康リーダーを育成することは年々難しくなっています。この問題は県を問わず健康作りにおける大きな壁でもあります。

滋賀県は、さまざまな分野で健康づくりが行われています。そこにある種の勢いを感じます。滋賀県そのものが大阪・京都という大都会のベッドタウンでもあるので、元気な若者の流入がその勢いを生んでいるのかもしれませんが。



沖縄県からは「何とかしなければ」という意気込みは伝わってきます。

しかしなかなかいい手段が見つからないようです。その根底に、健康リーダーが少なく加えて県民の意識が低いことがあるようです。発表の中でとても興味深いものがありました。沖縄県内の新聞にほぼ毎日掲載される死亡広告を分析したところ、20-60代で亡くなった方で親が存命している割合を算出すると、1985年の27.4%に比べて2015年は54.8%と倍増し、告別式の喪主が「親」である割合も3%から18%に増加していたというのです。家庭のレベルでも長寿を誇る高齢者よりも先に働き盛り世代が他界する、すなわち年の順に死んでいかない傾向が確認されました。



本サミットを通じて、私自身強く感じたことがあります、それは私たちが行っている短命県返上活動や健康づくり活動は、青森県だけでなく、日本人全体あるいは世界の人々の幸福（ウェルビーイング）に貢献できるということです。それだけ、健康づくりのテーマには共通するものがあります。

